

カラーデザインの拠りどころと本質

ー科学と感性の交流が色の必然性を生むー

カラーデザイン研究会 主査 松田 豊

1. 感性に科学の裏付けを

◆色彩は誰にでも扱え、良し悪しの評価も自由である。それはあるモノの表層の色の評価が多分に主観的で、感性に従った行為であることを意味している。

だが感性によるこれらの評価の奥に、客観的な裏付けとなる科学的根拠が存在している。

◆色彩と人間とのあいだに介在するアピランスは、光りによる物理的刺激が、生理的反応（知覚）を起こし、記憶と結び付いて心理を形成する、三つの段階に大別できる。何れの段階を重視するかは色彩に取り組む人の、立場と関心・興味によって重心が移動する。色の物理的領域は科学的究明がかなりなされた領域である。現在は色知覚の生理的研究に関心が高い。カラーデザインはこれらを基盤にして成立させたい。

◆カラーデザインは、説得のパワーと同意を得るためのエネルギーが必要な領域であろう。この心理的影響の先にデザインに不可欠の感性が存在するはずだから、最も科学の及びにくい領域といえる。だが光の物理的刺激で起こる生理的反応を、どれだけ敏感に受容できるか、微妙な刺激の差異を確実に感じ分け得るかの能力の差が、感性の鋭敏・鈍感に通じると考えている。

◆感性の鋭・鈍、良・否は受容器官の反応の差異に起因するが、恵まれた資質に加えて資質を磨く訓練が必要だろう。ある事に熟練熟知する訓練を積んで感じ分ける能力（＝感性）が鋭くなるから熟練の彼方に優れた感性が育つといえる。“優れた感性”はいい換えれば“鋭い感覚”であり、差異の識別能力が高く、微妙な違いを明確に感じ取れることである。識別閾値が低くかつ変動が少ない感覚的熟練に通じる。（佐藤愛子著、日本人の感覚と生活・ナカニシヤ出版）

◆色彩学の研究が進み学績が蓄えられた現在、作り手と使い手、生産と生活のインターフェースとして色が機能するためには、カラーデザインは、裏側に色彩学の確かな理論的背景を内包させたい。色彩の使用には確たる学の裏付けが可能である。それがカラーデザインの一面であり、創造性と共に本質だと考える。

2. カラーデザインとは

◆デザインはアクシデントの対語（by design and not by accident）であり、美術と技術の境界領域に立

地する知的生産の行為である。その行為には色彩の原理原則に加えて人文的な創造性・論理性・洞察力・吟味検討・愛・の5つの精神の裏づけが不可欠である。その反面、絶対を求めるのではなく、より良い妥協点を定める技と術の世界である。カラーデザインの課題は『モノ』の实在と意味・目的を色彩効果で表現し、表層効果を決定すること。

『モノ』の美的効果を構築し、環境（使用の場）との調和を成立させること。

『モノ』への収斂と環境への発育の2方向性を配慮し、形態・材質感と色彩の一致を図り、環境への調和を考えることにある。色彩理論上の間違いがなく感覚的に優れていることが大切だ。そして色と彩を発想の原点にすえて、機能と美を構成することにある。

◆色彩の情報力を考えると、抽象的に構築した色彩効果を『モノ』に適用する逆の発想が成立する筈で、それが今後の行き方になるであろうことを指摘しておきたい。また色彩の力により、楽しさ、美しさ、快適性を構築するには、より自由に、より豊かに、あらゆる色彩現象を感覚的に体験しなくてはならない。

3. カラーデザインの拠りどころは？

◆視覚のメカニズムと眼のはたらき（眼球の構造と機能・残像・対比・視認性・明暗順応 etc. などの諸効果）を重視する。その上に視・触の感覚一致（共感覚）が原則である。色彩は他の感官と連携することで説得力と普遍性が高くなる。通常色彩効果によって起こる様々な情緒反応・印象が、無意識下の隠し味となって色彩の楽しさと魅力を生む。組み合わせを前提として、単色が備えている効果に強い関心をもっている。またモノに適用した色がどれだけ必然性を備えているか、その訴求がカラーデザインの目標の一つであると思う。

4. 色彩の必然性には時が絡む

◆色彩は時の経過とともに美感が変化消長するので、流行色への対応を重視する。色のベースのモノの性質によって、消長・推移の時間に、長短と振幅の差があるものの、いわゆる流行変化の宿命が強く働くから、色彩嗜好の変化に同調することも大切だ。